

## 【研究ノート】

# 蘇軾の農村風景を描いた詞について

保 莉 佳 昭

### 一

北宋の蘇軾（そ・しょく／1036～1101）は、詞に新境地を拓いた。それは、従来、専ら詩で詠まれて来たテーマ・題材を詞に取り入れ、独創性に富む作品を詠んだ点にある<sup>1)</sup>。その中で、徐州（今の安徽省徐州）知事を務めていた時に作った「浣溪沙」詞は、眼前の農村風景、生き活きとした農民の姿を詠んだもので、蘇軾以前に見られない注目すべき作品である。この詞については、中国の研究者に幾つか先行研究があるものの<sup>2)</sup>、日本には本詞を扱った論考は無い。そこで本稿では、この農村を詠んだ「浣溪沙」詞を取り上げ、内容、修辞等を分析し、その特徴を明らかにしてみる。なおテキストは『蘇軾詞編年校注』（上海古籍出版社、2002年）を用いた。

### 二

蘇軾は熙寧十年（1077年）四月、徐州知事に着任した<sup>3)</sup>。その翌年の春、徐州はひでりに見舞われる。ひでりの際、知事は雨乞いの儀式をするのが通例であり、蘇軾も郊外にある石潭という淵で雨乞いをした。その経緯は、「起伏龍行」詩の「叙」に書かれている。

徐州城東二十里有石潭。父老云、与泗水通、増損清濁、相応不差、時河魚出焉。元豐元年春旱。或云、置虎頭潭中、可以致雷雨。用其說、作起伏龍行一首。

【大意】徐州の町の東方約11キロメートル<sup>4)</sup>に石潭がある。土地の老人は「（石潭は）泗水と通じ、（水の）増減清濁は、（泗水と）一致しており、時に川魚が姿を現すこともある」と言う。元豐元年の春にひでりがあった。ある人が「トラの頭を潭の中に置けば、雷雨を降らせることができる」と言った。その言い伝えを使って、「起伏龍行」一首を作る。

この「起伏龍行」詩は七言二十句の作品であるが、その中に次のようにある。

東方久旱千里赤、三月行人口生土。碧潭近在古城東、神物所蟠誰敢侮、……赤竜白虎戰明日、倒卷黄河作飛雨。嗟吾豈樂鬪兩雄、有事徑須煩一怒。

【大意】東方の地（徐州）は長い間ひでりに見舞われ、千里にわたり作物が実らぬ土地と化し、三月になっても道を歩く人の口は（砂ほこりで）ジャリジャリしている。しかし、

碧の水をたたえた淵が古い城壁の東側の、ここから近い所にあり、神秘的な生き物が棲み、人々はみな敬っている。……明日、赤い竜と白いトラが闘い、黄河を逆さまに巻き上げて雨を降らす。さて自分は両雄（竜とトラ）の戦いを楽しむ気は無いけれども、事情があって、どうしても1回怒りを起こしてもらう必要がある。

雨乞いの儀式として「トラの頭を潭の中に置く」のは、竜の怒りを誘うためであり、両雄の闘いで黄河の水が巻き上がり、雨となって降って来ると考えられていた。この雨乞いの儀式は、非常に注目に値するが、ここでは深入りしない。

さて、蘇軾の祈りは見事、竜神に通じ、雨が降った。そこで彼は再び石潭に行き、竜神に感謝をした。その道中で作られたのが「浣溪沙」詞である<sup>5)</sup>。この「浣溪沙」詞は、五首連作であり、以下、一首ずつ作品を読んでいくことにする。

#### 浣溪沙 其の一

照日深紅暖見魚。連溪綠暗晚藏烏。黃童白叟聚睢盱。  
麋鹿逢人雖未慣。猿猱聞鼓不須呼。歸家說與桑採姑。

【大意】夕日が水面を真っ赤に染め、水はぬるみ、魚が川面に姿を現す。谷川の両岸に木々が茂って大きな影を作り、カラスがそこに巣くう。老人と子供が浮き浮きした顔をして集まって来る。

シカは人に会うのに慣れていないが、サルは呼ぶまでもなく太鼓の音を聞くとやって来る。老人と子供は家に帰れば桑摘みの村の娘に私（蘇軾）に会ったことを話すだろう。

本詞では、まず夕陽の射す中、水量の増した水ぬるむ川の様子を描く。魚が気持ちよさそうに泳ぎ、川岸の木々は雨を受けて葉が生氣を取り戻す。そこに、老人と子供が自分（蘇軾）を見ようと、集まって来る。それに続く後段は、シカとサルの描写から始まる。このシカとサルは、『傳幹注坡詞』に「野人如麋鹿，猿猱」という注があり、「シカ（麋鹿）」が前段の最後に言う老人を表し、「サル（猿猱）」が同じく子供を表すと解している<sup>6)</sup>。知事の姿を間近で見る機会はまれであるから、老人も子供も集まってくる。老人はためらいがちに近づいて来るのに対して、無邪気な子供は、知事の行列が鳴らす太鼓の音を聞くと、すぐさま集まって来る。それを戯れに、シカとサルで喩え対照的に描いたのである。最後は蘇軾の想像を綴る。ためらいがちに見物していた老人も、子供と一緒に帰宅してからは、自分の娘（子供の母親）へ「領主様に会った」と伝える。蘇軾は、自分を見にやって来た老人の興奮気味の様子が手に取るように分かり、この様に詠んだのである。

本作品は、夕暮れの風景描写から始まり、蘇軾一行を見物しに来た農民たちの姿を詠う。見物に来た老人と子供は浮き浮きとし、家に帰れば村の娘に蘇軾に会ったことを話す。これは、彼らが蘇軾を慕っているからに他ならない。ただ本詞は、農民が自分の思いを綴ったものではない。農民の様子を蘇軾が詠ったものである。少々意地悪な言い方をすれば、この「浣溪沙」詞は、蘇軾自ら「私は領民に慕われている知事である」と言っていることになる。ただ、このように言うことができたのは、「自分は領民に慕われるだけの仕事を

している」という自信があったからに他ならない。平和な農村風景の描写の裏に、彼の役人としての自負が詠まれていることも、見逃せないだろう。もう一点、本詞の特長について付け加えるとすれば、前半の修辞の巧みさであろう。「紅」「緑」「黄」「白」という色彩の字が前段に並び、視覚的効果を狙っている。また、動く「魚」と眠る「鳥」、ためらいがちにやって来る「麋鹿」とすぐさま近づいて来る「猿猱」とを対照的かつ巧みに描いている。色彩、動きの対照を入れることで、作品に変化を付け、読者を引きつける効果をあげている。

### 浣溪沙 其二

旋抹紅粧看使君。三三五五棘籬門。相挨踏破蒨羅裙。  
老幼扶携収麥社。烏鳶翔舞賽神村。道逢醉叟臥黃昏。

【大意】女たちはあわてて化粧をして知事を見ようと、三々五々、柴を編んだ門に並ぶ。互いに押し合いへし合いして、赤い薄絹のスカートの裾を踏んで破ってしまうほど。

老人と子供は互いに手を携えて麦の収穫祭に向かい、カラスとトビが神への感謝祭をする村の上空を舞う。夕暮れ、酔って道に寝転がる老人に会った。

第二首は、一転して女性の様子を描く。前作の「老人と子供は家に帰ればきつと桑摘みの村の娘に私に会ったことを話すだろう」を受けたものである。農家の女性は、老人と子供から「知事様がいらしている」ことを聞き、一目見ようと道端に出て来る。初め、見物人は子供と老人だけであったが、途中から女性たちが次々と加わる。彼女たちはみな化粧をして、赤い薄絹のスカートを穿いている。少しでも綺麗に見せたいという女心である。女性の化粧については、詞でよく詠われる。しかし、それは妓女の化粧であり、本詞のような、農村の女性の化粧を詠うのは極々まれである。「あわてて」というのは、蘇軾一行を見逃したくない、どうしても見たいという女性たちの気持ちを表す。蘇軾は、彼女たちがあわてて化粧をしている姿を直接見たわけではない。ただ、その顔を見て、このように感じたのである。農村の女性の化粧は、酒宴で見る妓女の化粧と比べれば、当然見劣りする。「あわてて」の語には、下手で野暮な意味合いも含まれていよう。また、赤い薄絹のスカートを穿いているというのも見逃せない。もちろん、それは一張羅であろうが、それにしても絹のスカートを持っているのは貧農ではない。彼女たちは、出来る限りの見繕いをして、家から出て来た。そして、蘇軾の姿を一目見ようと、道端をうずめ、スカートの裾を踏んで破くほど押し合いへし合いして、少しでも前に出ようとする。ここから、農村の女性が蘇軾を慕っていることが窺い知れる。人望の無い知事であれば、通りかかっても領民は集まらない。まして、女性は家から出て来ることはないだろう。

話は逸れてしまうが、日本の時代劇を見ると、お殿様やお役人様を通る際、庶民が道端にひざまずいて土下座をする場面が出てくる。蘇軾の「鴉種麥行」という詩にも、役人の威張り腐った態度を風刺して「農夫羅拝鴉飛起、勸農使者來行水（農夫が並んで土下座をし、カラスが急に飛び立った。農事監督のお役人が水利を良くしに来たのである）」とあり、中国でも役人が来れば土下座をしていたことが分かる。蘇軾も領民を「並んで土下座」を

させることは当然できた。しかし、蘇軾はそうはしない。むしろ自分を見物したい農民たちの好きにさせる。本詞前半からは、子供、老人、そして化粧をして一張羅を着て押し合いへし合いする農家の女性たちの姿を、微笑みながら見ている蘇軾の姿が読み取れよう。

さて、後半では、別の農民を描く。連れ立って祭に向かう老人と子供である。彼らは、第一首にあった老人と子供であろう。蘇軾一行を見終わったので、祭に向かうのである。また、目を空に転ずれば、カラスとトビが、祭のお供え物を狙って旋回している。蘇軾が通りかかった時、村では麦の収穫に感謝する祭をやっているところであった。ちょうどその時、恵みの雨が降ったので、合わせて神に感謝の祭も行われていた<sup>7)</sup>。道端には、祭に浮かれ酒を飲み過ぎたのであろう、酔って寝転がる老人がいる。行儀は悪いが、治安が悪ければ決してこんな呑気なことはできない。この老人の姿は、村がよく治まっていることを表し、それは裏返せば、蘇軾の政治手腕の高さを物語っている。更に最後の2句について付言すれば、視線の移動も見逃せない。空のカラス、トビを詠んだ後、道端の酔っ払いを描く。遠近、上下の対照から、詞に空間的な広がりを加えている。

本詞には、活発な農家の女性と、農民の平和な暮らしぶりが綴られている。更にそこには、領民に慕われ、領地をよく治めているという蘇軾の自負が込められていることも見逃せない。

### 浣溪沙 其三

麻葉層層繡葉光。誰家煮繭一村香。隔籬嬌語絡糸娘。  
垂白杖藜擡醉眼。捋青搗麩軟飢腸。問言豆葉幾時黃。

【大意】アサの葉が重なり茂り、イチビの葉が光る。どこかの家で繭を煮ていて、村じゅうがその香りに包まれる。垣根越しに絹糸を繰る若い女性の声が聞こえて来る<sup>8)</sup>。

白髪の老人が杖をつき、頭をもたげ酔った目で見、緑の小麦を摘み取り、つき砕いて小麦粉を作り、私を労い空腹を満たしてくれる<sup>9)</sup>。そこで尋ねてみた、「豆の葉はいつ黄色くなるのか（豆はいつ実るのか）」と。

第三首は、植物の描写から始まる。雨が降って植物は生氣を取り戻した。蘇軾が描いたのはアサとイチビである。二つとも主に繊維を取る植物であり、農村の描写にふさわしい。雨は植物だけではなく、人間も元気付けた。農民は養蚕に勤しみ、繭を煮る匂いが村じゅうに漂い、糸を繰りながら楽しそうに雑談する若い女性の声も聞こえて来る。農村、村人の様子を、イチビの葉の輝き、繭を煮る香、若い女性の声を通して、視覚、嗅覚、聴覚に訴え、臨場感があふれる手法で描いている。本詞の前半には、人の姿が一人も描かれていない。それでいて、活気のある村、喜々として働いている農民の様子が伝わって来る。

後半は一転して、農民と面と向かう蘇軾が描かれている。その農民は、酔った老人である。第二首にも「酔って道に寝転がる老人」が描かれていたが、ここにも登場する。それは、平和な村を象徴する描写と言えよう。彼は摘み取った緑の小麦を臼でひき、小麦粉を作っていた。そこに、知事の蘇軾が現れたので、小麦粉をこねて焼き、蘇軾にご馳走してくれた。あるいは、この老人が露店を営んでおり、蘇軾はそこに立ち寄って小麦粉をこね

て焼いた「餅」を買い求めたのかもしれない。ご馳走になった蘇軾は、「空腹にはたまらない」と声を漏らし、老人に豆の実る時期を聞いてみる。もちろん知事の一行であるから、何がしかの食料は携帯していたに違いない。ところが、蘇軾は農民が作った食べ物をためらうことなく食べ、気軽に語り掛ける。知事と領民との微笑ましいやり取り、語らいの様子がよく伝わって来る。このようなやり取りを詞で描いたのは蘇軾が初めてである。そもそも詞は艶っぽい恋歌であり、知事と領民とのやり取り、語らいを詠むものではなかった。ここに、蘇軾の詞における新境地がよく見て取れる。この様子は、「東坡八首」詩第五首にある次の六句を想起させる。

農父告我言，勿使苗葉昌。君欲富餅餌，要須縱牛羊。再拜謝苦言，得飽不敢忘。

【大意】老農夫が私に教えてくれる。「苗のうちに葉を茂らせては駄目だぞ。もし餅をたくさん作りたいのならば、ウシとヒツジに好き放題に踏ませる必要がある」と。私は何度もお辞儀をして、この老農夫の忠言にお礼を言う。「腹いっぱい食べることができた時、今日の教えをけっして忘れません」と。

この「東坡八首」詩は、元豊四年（1081年）、黄州（湖北省黄冈）に流されていた時の詩であり、本詞と創作状況は違う。しかし、二首の作品から共に窺い知れるのは、人と接する時に何のこだわりも持たない蘇軾の姿勢、態度である。誰に対しても身分の上下など全く念頭になく自然体で話しかける姿である<sup>10)</sup>。この姿は、次の「浣溪沙」詞第四首にも描かれている。

#### 浣溪沙 其の四

蔌蔌衣巾落棗花。村南村北響犂車。牛衣古柳売黃瓜。  
酒困路長惟欲睡。日高人渴謾思茶。敲門試問野人家。

【大意】ナツメの花びらが衣と頭巾にはらはらと落ちる。村の南にも北にも糸繰り車の音が響いている。粗末な衣を着てヤナギの老木の傍らで黄瓜を売っている者がいる<sup>11)</sup>。

酒に酔ってだるく、道は遠く、ひたすら眠くてたまらない。日は高く、のどは渴き、やたらと茶が飲みたくてたまらない。門を叩いて、農家に（茶を飲ませてくれと）聞いてみるとしようか。

この第四首も、植物の描写から始まる。ここでは、ナツメの花の散る様子を描く。ナツメの花は薄緑色で小さく、花として注目を集めることは無い。ところが、蘇軾はそのような花から詠い起こす。ナツメの花を選ぶという新奇さに、散り落ちるという動きを加え、読者の目を引く表現に仕立てている。続いて糸繰り車の音を詠む。糸繰り車の音が村じゅうから聞こえて来るということは、繭がたくさんできた証拠である。第三首にも、糸繰りのことが詠まれていたが、そこに詠われていたのは、女性たちの声だけであった。一方、本詞では、人の声は書かれていない。糸繰り車の音だけである。それがむしろ、おしゃべりをしている暇など無いほどに糸繰りの仕事が忙しいことを強調し、活気ある豊かな農村

を巧みに描き出すことになっている。本詞も、冒頭は視覚と聴覚に訴えた表現が有効に使われている。これに続き、日射しを避けてヤナギの古木の下で黄瓜を売る農民を描く。この農民は、麻のくず糸で作った衣を着ている<sup>12)</sup>。前の第二首では、赤い薄絹のスカートを穿いている女性が描かれていたが、ここでは普段着の農民が登場する。また、この農民は蘇軾が現れても、自分の商売をやめない。たぶん関心を持ちながらも、商売を放り出すまでのことではないと思ったのであろう。化粧をして赤いスカートを穿き我先に道端へ出て来る女性と対照的でおもしろい。

詞の後半は蘇軾自身のことを語る。酒を飲み、眠たく、のどが渴いてたまらない。竜神へのお礼参りの際に、酒宴が催されたのである。蘇軾は酒に弱かった。だから、飲酒後の移動はかなりきつかったに違いない。「路長」の表現は、実際の距離をいう以上に、心情的な辛さを言ったものである。のどが渴いてたまらなくなり、蘇軾は農家を訪ね、茶をもらおうとする。第三首で、蘇軾は農民が小麦粉をこねて焼いたものを食べた。今度は、のどが渴いたので自分から農家の門を叩こうとするのである<sup>13)</sup>。彼は常に自然体である。空腹であればご馳走になり、のどが渴けば農家にお茶をもらいに行く。

#### 浣溪沙 其の五

軟草平莎過雨新。輕沙走馬路無塵。何時收拾耦耕身。  
日暖桑麻光似潑。風來蒿艾氣如薰。使君元是此中人。

【大意】地一面に柔らかな草が生え、雨上がりの新鮮な空気に包まれる。砂は雨を吸い、馬が走っても道に舞い上がることはない。私はいつになったら役人生活から退いて、弟と共に農夫の身になれるだろうか。

日が暖かく射し、クワとアサの葉は輝き、あたかも光があふれ出ているようだ。風がヨモギを吹いて、草の気はまるで香草のように芳しい。自分は元々この中の人間なのだ。

最後の詞は、農村の風景を見て抱いた自らの思いを綴る。雨が降った後の澄んだ空気、砂ぼこりの立たない道は、世俗の穢れの無い世界を象徴している。それを見て「弟の蘇轍と一緒に早く農村に身を引いて農事に励みたいものだ」と言う。「耦耕」という語は、二人並んで田を耕すことで、『論語』『微子』篇にある「長沮桀溺耦而耕（長沮と桀溺が並んで田を耕していた）」という文に基づく。「長沮」と「桀溺」は古代の有名な隠者である。蘇軾は自分と弟と一緒に農村で暮らす姿を二人の隠者に重ね合わせる。彼が憧れるのは、欲望うずまく俗世間に背を向けて農民として生きる隠者である。蘇軾は都で党争に巻き込まれ、それに嫌気がさして地方に出た。雨上がりの澄んだ空気に包まれ、砂塵が立たない農村は、権力闘争とは無縁の世界であり、そこは蘇軾が志向する境地であった。ただ、彼も簡単に役人を辞められないことを分かっている。「何時」という表現からは、未だ役人生活から身を引くめどの立たない不安が窺い知れよう。

詞の後半も、前半と構造は同じである。農村の美しい風景を描く二句の後に、感懐を詠んだ一句が続く。蘇軾の目は、まず光を発するように輝くクワとアサに向かう。それらは、華麗に咲く花ではない。クワはカイコの食料で、アサは衣の材料、薬用である。ともに鑑

賞に供する植物ではないけれども、蘇軾はそこに美を見出す。加えて、その描き方も巧みである。クワとアサの葉の輝き、ヨモギに吹く風、芳しい草の香り、それぞれ視覚、触覚、嗅覚に訴えた表現である。アサの描写は再登場であり、蘇軾にとって、アサは農村を象徴する植物であったことが分かる。この風景描写に続いて、最後は「自分はもともと農村で暮らす人間なのだ」と言う。文字通り解釈すれば「自分は元々農民なのだ」ということである。しかし、彼は農民の出ではなく、この言葉は出自、家柄を言ったものではない。彼の言わんとするのは「自分の心の拠り所、基盤とする所は農村なのだ」ということである。だからこそ、蘇軾は農民とごく自然に接し、あたかも近所の家を訪ねるがごとく「門を叩く」ことができたのである。

さて、本題からは離れるが、この連作詞の内容から、蘇軾一行の旅程について辿ってみたい。第一首、第二首には、それぞれ「照日」、「黄昏」とあり、共に夕暮れの風景が詠まれている。一方、第四首には「日高」とあり、文字通り日の高い日中のことが書かれている。第五首も、「日暖」等の表現からみると、やはり昼間の光景を詠んだと見做せる。もしこの連作詞の排列順が作成順であるとする、このたびの道中は、途中で一泊したことになる。あるいは、第一首、第二首が石潭に向かう時の作であり、第三首以降が帰りの作かもしれない。夕方に石潭へ向かい、その近くで一泊し、翌日の午前にお礼の儀式をして酒を飲み、日中、帰途に就いたと考えれば、時間の前後も説明がつく。また、前二首と後三首では、場面が変わっているように読めるが、それも理解できる。行きでは仕事を放り出して蘇軾一行を見物しに出て来た農民たちも、帰りはそれぞれの仕事に励んでいるのである。

### 三

以上、五首の「浣溪沙」詞を読んで来たが、蘇軾研究の第一人者である前中国宋代文学学会会長の王水照先生は、この連作詞について、以下のような詳しい指摘をされている。先行研究を総括しており、少々長いが引用してみる。

蘇軾は独創性に富む作家であり、徐州時代の詞作でもまた新境地を開いた。詞は最初、民間から生まれ、題材も広がった。現存の敦煌曲子詞には、農村の生活を詠んだ作品も少なくない。しかし、このような題材は、文人詞において殆ど中断されていた。蘇軾は、それを取り上げて発展させ、文人詞の中で初めて農村の題材を描いた詞人である。……（中略）詞に描かれているのは、雨あがりの初夏麦収の農村風景であり、生き生きとした生活画である。その中には、「自分はもともとここで暮らす人間なのだ」という詩人の感情が滲み出た所もあるけれども、その描き方は淳朴であり、親しみがこもっており、興趣は尽きない。彼以前の文人詞にも、時に農村を題材にした作品があるけれども、そこに現れる漁夫、洗濯をする女、蓮取り娘などは、実際には隠士の化身、あるいは文人趣味に染まった民間女性であった。それに対して蘇軾のこれらの詞は、土のにおいのする農村風景を描き出しており、これは彼が切り開いた豪放詞派の偉業の一つである<sup>14)</sup>。

確かに本作品には「土のにおいのする農村風景」が描かれている。しかし本コメントには、最も大事な指摘が抜けている。それは、この連作詞が、農民と自己との間に壁を作らず、全てに自然体を貫く知事蘇軾を描いている点である。自分を見に来た農民たちには、道端で好きなように見物させ、土下座など強くない。餅を振る舞われればためらいも無く食べ、気軽に収穫の時期を問い、のどが渴けば近くの農家に茶をもらいに行く。この姿勢は、第五首の「自分はもともと農村で暮らす人間なのだ」という言葉に集約される。「自分の心の拠り所、基盤とする所は農村なのだ」ということであり、蘇軾の役人としてのスタンスである。だからこそ、彼は農民と自然に接することができたのである。それは、ふんぞり返って農民をさげすむ役人への批判であり、党争に明け暮れる政治家への強烈な反発といえよう。

蘇軾は、この連作詞の少し後に次の詞を作っている。

#### 浣溪沙

慚愧今年二麦豊。千歧細浪舞晴空。化工余力染天紅。  
歸去山公因倒載。闌街拍手笑兒童。甚時名作錦薰籠。

【大意】ありがたいことに今年は大麦と小麦が豊作である。千もの穂先がさざなみのように、晴れた空のもと、風に揺れている。造物主は（麦を育てた）余力で鮮やかな赤い花を咲かせた。

私は酩酊して前後逆に馬に乗る始末。だから子供たちは道を遮り、手を叩き笑いながら言う、「知事様は、いつ『瑞香花』というお名前になられたのですか」と。

今年は大麦、小麦ともに豊かに実った。蘇軾は知事として天の神に感謝する。さらに、香しい瑞香花（ジンチョウゲ）が見事に咲いていることも、天の恵みという。本詞は「蔵春閣」という建物の庭園で作られたもので、この庭園は瑞香花で有名であった<sup>15)</sup>。知事の蘇軾は農民と一緒に麦の豊作を喜び、また庭園の瑞香花を愛でる。

後半は蔵春閣で行われた酒宴から帰る蘇軾の姿を詠う。彼は酒宴で酒を飲んで酔っ払い、馬に後ろ向きに乗って帰る<sup>16)</sup>。それを見た子供たちは手を叩いて大笑いする。「知事様は、いつ『瑞香花』というお名前になられたのですか」とからかう。これは、蘇軾の酔って赤い顔を、紅の瑞香花になぞらえた表現である。蘇軾は、子供たちに笑われる自分の姿を敢えて詞に書く。自分の酔った姿をさらけ出すことで、「自分と農民、領民の間には壁など無い。苦楽を共にしていく」という信念を身をもって表そうとしたのである<sup>17)</sup>。この詞を読むと、蘇軾の自然体で民衆に溶け込んでいる姿がありありと目に浮かぶ。

農村風景を詞で詠んだことは、確かに新境地に違いない。しかし、自然体で農民と接する自己の姿を詞に詠んだことも、けっして見逃してはならない。むしろ、蘇軾が農村を心の拠り所にして、常に領民と同じ目線に立つ姿を描き、役人としての生き方を詠んだことこそが、「浣溪沙」詞の真価と言えるのではないだろうか。



〔注〕

- 1) 例えば、亡き妻への追慕を綴った「江城子（十年生死兩茫茫）」、狩りの様子と異民族の西夏を討たんとする気概を勇ましく詠った「江城子（老夫聊發少年狂）」、月への憧れを述べながら弟の蘇轍への思いを訴えた「水調歌頭（明月幾時有）」等である。
- 2) 本詞に関する最近10年間の先行研究として、王靖懿「論蘇軾《浣溪沙》農村組詞五首」（『徐州工程学院學報』第23卷第3期，2008年），楊一之「蘇軾農村詞的特色」（『安徽文學』2010年第10期），楊奕蓉「試論蘇軾農村詞的親農性及其必然性」（『現代語文』，2011年）がある。
- 3) 『蘇軾年譜』（中華書局，1998年）卷16上冊360頁参照。
- 4) 中国宋代の1里は約553メートルに相当する。
- 5) この「浣溪沙」詞には、次の序文が付けられている。「徐門石潭謝雨，道上作五首。潭在城東二十里，常与泗水増減清濁相應（徐州の石潭で雨が降ったことに感謝し，その道中で五首の詞を作った。石潭は町の東側二十里にあって，常に泗水と〔水の〕増減清濁が対応している）。ここに書かれている内容は，本文中で引用した「起伏龍行」詩の「叙」と重なる。
- 6) 『宋傳幹注坡詞』（北京図書館出版，2001年）卷10参照。
- 7) あるいは，「賽神村」も麦の収穫に感謝する祭のことをいっているのかもしれない。
- 8) 「絡糸娘」を虫の名と解釈する説もある（中国詩人選集二集『蘇軾』等）。ただ，ここでは，前に「煮繭一村香」とあり，繭から糸を取る作業を述べていることから，糸を繰る娘たちを詠んでいると解釈した方が穏当であろう。『蘇軾全集校注』「詞集」（河北人民出版社，2010年）では「此處有意用作双関語，既指昆虫『紡織娘』，亦指繰糸姑娘（ここでは，わざわざ掛詞を使っており，虫の『クダマキ』を指すとともに糸繰りの娘も指す）」（214頁）と説明している。
- 9) 「軟飢腸」は，すいた腹を満たす，という意味。『蘇軾詞編年校注』は「軟」を本字の「軟」に作り「猶飽（飽と同義）」と釈義し，蘇軾の「発広州」詩の「三杯軟飽後，一枕黒甜余（三杯軟飽の後，一枕黒甜【こくてん】の余）」の自注「浙人謂飲酒為軟飽（浙地方の人は飲酒を軟飽と言う）」を引いている。ここでは，蘇軾が麦焦がしの食べ物をもって空腹を満たしたことをいったのであろう。なお，中国詩人選集二集『蘇軾』は「空腹には，さもうまそうだ」と訳している。
- 10) 楊奕蓉「試論蘇軾農村詞の親農性及其必然性」では，「浣溪沙」詞の特徴を「憫農（農民を憐れむ）」、「友農（農民を友とする）」、「愛農（農民を愛する）」と論じている。確かに「浣溪沙」詞からは農民を愛する蘇軾の姿が窺えるが，もう少し根底にある思想を考察するべきではないか。蘇軾がそもそも既成概念に全く囚われないことは保苜佳昭『新興与伝統～蘇軾詞論述～』（上海古籍出版社，2005年）参照。
- 11) 「牛衣」の2字，『傳幹注坡詞』は「牛依」に作る。「牛依」であれば，「牛をヤナギの古木に繋いで黄瓜を売る者がいる」という意味になる。
- 12) 『漢書』卷七十六「王章伝」の「章疾病，無被，臥牛衣中（王章は病に罹ったが，布団が無く，牛衣にくるまって寝た）」の顔師古注に「牛衣，編乱麻為之。即今俗為龍具者（牛衣は，乱麻を編んで作る。すなわち今の俗に龍具というものである）」とある。「龍具」は牛に掛ける蓑状のもの。
- 13) 実際は蘇軾が部下に，農家に行ってお茶をもらって来るよう命じたのかもしれない。ただ，それでは蘇軾の個性が消えてしまう。そこで，ここでは文字通り蘇軾自身が試みに門を叩いて農民の家を訪ねようとしたと解しておく。

蘇軾の農村風景を描いた詞について

- <sup>14)</sup>『蘇軾』(上海古籍出版社, 1981年) 40～41頁。原文は中国語。訳は筆者によるもの。
- <sup>15)</sup>本詞には「徐州蔵春閣園中(徐州の蔵春閣の庭園の中で作った)」という題が付けられている。
- <sup>16)</sup>「山公倒載」は、西晋の山簡の故事を踏まえる。彼は酒が好きで、時折、外出しては痛飲した。人々はその様子を見て歌を作って歌った。その中に「山公時一醉, 径造高陽池。日莫倒載帰, 酩酊無所知(山公〔山簡〕は時々酔っ払うと、すぐに高陽の池に行く。日が暮れると前後逆に馬に乗って帰り、酩酊してそれに気づかない)」とある。『世説新語』「任誕篇」に見える。なお、「倒載」については、車に寝転ぶという解釈もある。
- <sup>17)</sup>『蘇軾詞編年校注』に本詞最後の二句について「以上兩句, 作者以山簡自比, 写自己与民同楽(以上の二句は、作者自身を山簡に喩え、自分と民衆とが共に楽しむ様子を詠んでいる)」とある(上冊230頁)。

**【提要】**

关于苏轼在知徐州之时所作的五首《浣溪沙》词“照日深红暖见鱼”, “旋抹红妆看使君”, “麻叶层层糝叶光”, “蔌蔌衣巾落枣花”和“软草平莎过雨新”, 从来认为是在词史上首次描写农村风景之作品。但是这五首词, 还歌咏知徐州的苏轼以“使君元是此中人”一句为精神依靠, 一起站在农民的立场来, 以自然的态度与农民接触。我们要注意的是, 苏轼在这些词里初次吟咏官吏的自己接触农民之态度这一点。